

終末期に向き合うこと

山 本 典 子

1. はじめに

日本での全人口に対する高齢者の割合は、総務省統計局のデータによれば、2015年に26.7%となり、国民の4人に1人以上が高齢者となっている。将来においても、2060年まで高齢化率は一貫して上昇していくことが見込まれており、2060年時点では、国民の約2.5人に1人が高齢者という世の中になるとも言われている。

還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、白寿などと、日本では古来、節目を付けて長寿を祝う習慣があった。現在もそれらは家族の祝い事とされている。高齢者、いわゆる「お年寄り」は、今ある社会を築いてきた功労者であり、人生の先輩として敬うべき存在として扱われる。自治体が100歳を超える高齢者を祝い、「長寿日本一」或いは「ギネスブック認定、長寿世界一」などと、長寿をめでたいこと、望ましいこととして称える。産業、医療などの発展により、人の寿命は延び、健康寿命、サクセスフルエイジング、プロダクティブエイジングといったの言葉の出現にもみられるように、健康で実りある長い老後を過ごすことが目指されることとなっている。健康で長生きしたいという思いは、世界中の誰もが持つ普遍的な願いであるといえるであろう。

しかし、その一方で、高齢社会にあって、マスコミを通じて、高齢者の福祉を若い人々が担いきれない時代がくるという警告が、ことあるごとに突きつけられる。それと同時に、認知症という問題についても様々に取り上げられ、高齢者のみならず、どの年齢層の人にとっても、将来への不安を招く大きな要因となっている。また、最近、老化に伴う判断や運動機能の鈍化を取り上げて、高齢者による自動車事故が大きく報じられることが相次ぎ、高齢者に運動免許

の返納を強く勧めている。加えて、高齢者には介護保険料を支払う義務も課せられるなどの負担も増えた。こうして、年を重ねるうちに、人は自分がいずれ、社会や家族の「厄介者」、社会的弱者となり、認知症を患って精神的弱者になるのではないかという漠然とした恐れを抱きながら生活するようになる。また、家族も、いつかそのような「厄介」な状態になった親や配偶者の世話をしなければならないという不確定な心配をする。或いは、これらが現実となっている。

そもそも、高齢者とはどのような人のことをいうのであろうか。世界保健機関（WHO）の定義では、65歳以上の人のことを高齢者という。その中でも、65歳から74歳までを前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と呼んでいる。しかし、人間の発達、老化のスピードや方向性のベクトルには個人差があり、心理学の観点からは、そういった年齢のみによって、高齢者を一括りにして定義するのは適当ではない。

これまでに多くの発達論が展開されており、人の発達段階の区分法やそれぞれの段階につけられた名称は様々であるが、出生以来、乳幼児期、児童期、青年期といった上昇的なイメージをもつ成長をしつつ、社会の中核を担う成人期に至るまでの時期と、その後につき、死に至るまでの、下降線を描くようなイメージをもつ老年期の間には、不思議な、はっきりしない、しかし、かなり濃い色合いの線引きが行われていると考えられる。発達の過程では、人は出生の瞬間から、獲得と喪失を繰り返しながら歩を進めていくのであるが、老年期は、それ以前の段階に比べて、この獲得、喪失の両者のうち、喪失の色合いが際立って濃い。今日の研究では、老年期は喪失や下降的な変化のみに特徴づけられるものではなく、結晶性知能や人間としての円熟味、調和性などは上昇的に変化するということが示されているが、それでもやはり、社会的役割の喪失や心身の健康の下降的变化を伴う老化は否めない。

人は長く生きれば必ず高齢者となる。また、親しい人が高齢になっていくのを目撃もする。年を重ねると、ある場合には、若く元気なときとはすっかり変わって、様々な意味で、以前と同様のコミュニケーションをとることが難しく

なる場合もありうる。そのような状態になることを、人はどう理解し、受け止めればよいのかということ、長寿が当たり前のようになった現代において、我々は静かに深く考えてみる必要があると考えられる。

筆者は、人が生まれてから死ぬまでの人生、特に老年期をめぐる問題を考える一つのよすがとして、まず、一冊の本を取り上げたい。アメリカの文筆家、Reeve Lindbergh(1945-)の著した、*No More Words, A Journal of My Mother, Anne Morrow Lindbergh* (以下、*No More Words* と略記する)である。

(文中でこの本の引用をする場合は、筆者による拙訳であるため、原本の引用を稿末に記す。)

2. 老いを看取る者の心の変遷 (1) Reeve Lindbergh の場合

No More Words の中で「私の母」と示されているのは、飛行機で世界で初めて大西洋を横断したことで有名な Charles Lindbergh(1902-1974) の妻であり、自身も飛行家、優れた文筆家である Anne Morrow Lindbergh(1906-2001) のことである。母 Anne の *Gift from the Sea* という作品は、『海からの贈り物』という題で邦訳され、日本でも多くの読者を得ている。

さて、R. Lindbergh の *No More Words* は、数回の脳卒中の後、心身の健康がすっかり損なわれた母 Anne を、末娘である Reeve がバーモント州の自宅のすぐ傍の家に引き取って、専門のグループによる手厚い 24 時間体制の介護のもと、日々、母の心身の尊厳が保たれるように心を砕いて看取る 1999 年から 2001 年に渡る、自らが経験した心の変遷を記した著作である。

この題名は、Anne の詩の一節から採られたものである。

もう言葉はいりません。

でも、私がほかの人には

歌ってきかせることがあったとしても、

あなたには、きっとあなたにだけは

木の葉を一枚、花を一輪、そして、石ころを一つ
届けましょう。

—Anne Morrow Lindbergh,

「木の葉を一枚、花を一輪、そして石ころを一つ」

『ユニコーンとその他の詩』より (Lindbergh,R. 9頁) (*1)

本書は、プロローグ、12の章、エピローグから構成されているが、各々、Anne の作品、特に詩からの引用がちりばめられている。著者が幼少時から最近まで敬愛し、深い交流を通して大きな影響を受けた健康な時の母と、あたかも厚い樹皮に包まれて、中にかつての英知と愛情という樹液が流れているのがかうかがい知れない老木のようになった現在の母の在りようが交錯して、著者の心を揺さぶって、このような記録を書くことになったのである。

自分が深く敬愛してきた人の心身の衰えを目の当たりにすると、人は深く傷つき、現実をなかなか受け容れることができず、何とか回復、修復できないものかと願って努力する。

人間の関係は、つきつめれば必ず一対一であり、双方向的なものである。Reeve が傍にいて語り掛けても、Anne が表情を変えたり、確かな返事をしたりすることはもはや殆どない。まれに言葉を発しても、声帯は錆びていて、囁れ声しか出ない。文中に引用されている Anne の優れた知性と感性を感じさせる、かつての詩や講演などとの落差は余りにも大きい。

熟練の介護人の予想を何度も裏切って、Anne は移り変わる季節を生き延びていく。しかしながら、心身の状態が好転することはなかった。見守る人にとっては痛々しいことであり、また、本人自身にとっても心身の苦痛の大きさが推し量られ、Reeve や他のきょうだいたちの苦悩が節度をもって記されている。

そのような状況のもとで、死は解放といえるものなのではないかという思いが強まっていく。それにもかかわらず、時には Anne のまれに発する言葉や態

度によって、周囲は回復や状態の好転などの望みを一時的に抱くという、振子のような心境を味わい続ける。そして、Anne の僅かな言葉や行為の奥に、実際は何かの思考や意図、計画などがあるのではないかと考えを巡らせてしまう。

今や母子の関係は、心身共に衰え、死を間近にした母と、それを看取る娘という形ではなく、Reeve 自身が生まれてから現在まで、二人の間で交わされた言葉、共有した思い、生活などを想起し、それを再体験し、過去も過ぎ去ったものではなく現在に生き続け、新たな発見や気づきから、更に、彼女の人生観の深化を促すものであるということが汲み取れる記録である。

本書は、老化、介護、認知症などについて論じようとするものではなく、あくまでも一人の女性が、その人生のある意味決定的な、或いは危機的ともいえる時期に、自分の存在を賭けて、人間とは、真の一对一の関係とはということを確認しようとした記録である。

1932年に Charles と Anne Lindbergh 夫妻が、当時1歳の長男を誘拐され、殺害されたことは、世界を驚愕させた事件である。後に、Reeve が、やはり幼い長男を病気で亡くし、悲嘆にくれて、母親としての自分がこれからどうなるだろうと尋ねたときに、母 Anne がかけた、「母としてのあなたはもうあの子と一緒に死ぬのよ。それはどうしようもないこと。でも、それから、驚いたことに、あなたは生き返るの」(Lindbergh, R. 16 頁)との言葉が、本書の中で実証されるのである。

はじめはこの言葉の後半部分を決して信じるができなかった Reeve は、後に、次の子供の誕生とともに、自らも別の人生へと再生したと感ずるのである。この Anne の言葉は、今も Reeve の心に、たとえ苦しみや痛みがあったとしても、結局は人間の存在のすべてがそのままそれなりに美しいものであり、申し分のないものなのだと語り掛けている。生きることを肯定する Anne は、今も Reeve の中に生きていることを実感している。

仏教では、仏陀の出家のきっかけが、「生老病死」という避けがたい人の運命に気づいたことにあると言われている。確かに、生まれる、老いる、病に

かかる、死ぬという4つの運命は、人の力を超えたものによって決定されており、人はそれを受入れざるをえない場面が多々ある。これらを支配しようとする執着を捨てることが仏教的な救いであり、人の世の全てを神の摂理であると受けとることがキリスト教的な救いであるといえる。つまり、人は大きな生命の流れの中で生かされているということである。

筆者は、この箇所を示すところを、次のように考える。Anneがかつて危機的な状況にあった娘に対して与えた、おそらく自分自身が身をもって悟ったことをあらわす言葉が、Reeveの中で生き続け、彼女の体験を通して芽吹き、彼女の人生観を豊かにする。すなわち、そっと与えられた種子が大切に受け止められ、折に触れて想起されてきたことによって、体験に裏付けられた実感へと成熟するという双方向性をもった結実と言える、

実生活では、殆どコミュニケーションがとれず、かつての彼女との間に断絶があるかに思えるほどに見える90歳を越えた母を前にして、解明できない謎、手を伸ばしても何にも届かない空しさの空気に呑み込まれている時にも、心の中ではこれまでの年月に、母との間で起きた全てのこと——生活、会話、著作を読むことなどが、次々と甦り、心に働きかけて、新しい視野が開けたり、慰められたりする。過去の出来事は決して済んでしまったことではなく、いつまでも生きて働きかけ続けるのだということが実感される。

文中に、熟練の介護人が、長期間働き続けた介護人が燃え尽き症候群になる原因を、老人が沈黙して何も語らないために気が狂いそうになることにあると述べている部分がある(85頁)。人はだれしも確かな手ごたえを求めるものであり、介護人にとっては、要介護者に対して心身の限界まで尽くした結果として、何の反応も得られないことが最もつらいことだからである。

Reeveも、時には、母の無反応や無言を、自分に何か悪いところがあるからなのではないかという思いを追い払うことができない。しかし、そんななかでも、母羊に育児放棄された生まれたての子羊にミルクを飲ませる作業に夢中になっている時、その充実感によって、言葉による意思疎通の遮断や、相手の無反応に過度にこだわることの無意味さを悟る。

しばしば、我々は「元のあの人ではない」、「あんな風ではなかった」などというように、その人の壮健な状態の人物像をあるべき本来の姿であると信じて、それから外れた、特に、劣った状態を認めようとしない。しかし、胎児の状態から、生まれ、成長し、年老いて、或いは、病を得て、自分のみでは生きられなくなるまで、そして死ぬ瞬間まで、人は「あの人」なのである。人との交わりや働き、楽しみ、喜び、悲しみ、苦しみなどの経験を過去に残しつつ、終わりに至るのである。それら全てが「あの人」を作り上げ、また、関わったこの世の全ての人や物にその痕跡を残していく。

ここに、オーストリアの精神科医、心理学者である V. Frankl の二作品、『夜と霧』と『意味への意志』からの引用を記したい。

わたしたちが過去に充実した生活のなか、豊かな経験のなかで実現し、心の宝物としていることは、なにもだれも奪えないのだ。そしてわたしたちが経験したことだけでなく、わたしたちがなしたことも、わたしたちが苦しんだことも、すべてはいつでも現実のなかへと救いあげられている。それらもいつかは過去のものになるのだが、まさに過去のなかで、永遠に保存されるのだ。なぜなら、過去であることも、一種のあることであり、おそらくはもっとも確実なあることなのだ (Frankl 1977, 138 頁)。

われわれは価値を教えることはできません——われわれは価値を生きななければならないのです。

そして、われわれは他者の人生に意味を与えることはできません——われわれが彼に与えることのできるもの、人生の旅の饑^{はなむけ}として彼に与えるもの、それはただひとつ、实例、つまりわれわれのまるごとの存在という实例だけであります。というのは、人間の苦悩、人間の人生の究極的意味への問いに対しては、もはや知的な答えはあり得ず、ただ実存的な答えしかあり得ないからです。われわれは言葉で答えるのではなく、

我々の現存在そのものが答えなのです (Frankl 1972, 30-31 頁)。

長い模索ののち、Reeve は一つの境地にたどりついて次のように言う。「言語は最高の状態のときに於いてのみ有効だ。この世界で実際に起きていることは、言語を越えており、その真実は、それが何であれ、言語の形をとって、しかも絶好の機会に私たちに明かされる」(135 頁)。

そこに至るまでに、長い間、母の様子や、時に母の発する言葉などから、意味を推し量ろうとする無意識ともいえる努力がほぐれ、二人を隔っていた障壁がとりのぞかれたような気持ちになれた、ということであろう。

そして Reeve は、母の生涯のいろいろな時期における姿について考え始める。17 歳の母、25 歳の母、41 歳の母、そして今の自分と同じ 55 歳の母。母の著したあらゆる書籍、日記、学生時代に雑誌に寄せた詩、そして、それらの欄外に書き込まれた自作に対する酷評などが、今自分がしていることや考えていることとなんと似ていることかということに気づく。

或る夜、Reeve が自宅に帰ったあと、介護士が Anne を手伝ってベッドに入れると、Anne は「私の終わりの時がもうすぐ来るのよ。それはとても大事なこと」と言い、「あなたにはお礼の言いようありません」と、とても丁寧に礼儀正しく言ったこと、そして、介護士がドアを閉めた後も何度も「お礼の言いようありません」という言葉を繰り返していたことを聞かされる (111 頁)。

このような言葉の意味するところを深く推し量ろうとするのは、或る意味、無駄なことである。本人に本意を確かめることができないからである。しかし、確かなことは、彼女は育ちのよい、礼儀正しくあることを重んじる人だということ、そして、そのような人は長い人生の終わりが近いことを悟ると、自分の人生で、特に弱ってからの日々に世話になった人々に、このように感謝の気持ちを伝えることを義務、或いは、願いと考えるのが自然であろう。

残される人は、特に晩年、意思疎通が不能に陥ったと思われる人について、あまりの落差に、それまでの人生が台無しになってしまったのではなかろうかとか、人生の最後に、このような結末を迎えるのであるならば、懸命に生きる

この意味があるのか、などと考えることがある。

先述のように、生、老、病、死は、自分に起きることであるのにもかかわらず、そのこと自体は、自分にはどうすることもできないことである。人にできることは、ただ与えられた自らの生命をできるだけ豊かにに生きることであり、その結果、それも必ず他者との交流において多くを受け取り、多くを与えることであり、静かに人間の生活、生命の流れの中に確かな痕跡を残し、その流れを豊饒なものにすることであるということ、今や「健やかなるときも、病める時も」母と共に生きる Reeve がエピローグにおいて記している。

本書は、Anne の詩集、*The Unicorn and Other Poems* (『一角獣とその他の詩』) の一節の引用でしめくくられている。

遺言

でも、あなたなしでどうして生きていけるでしょう？——彼女は叫んだ

死んだ時、全世界をあなたに遺してあげたでしょう；

大地と大気と海の美しさを；

つばめの飛行と一本の木；

雨のしずくの一触れ、風の抱擁

嵐の情熱、冬の冷たさ

羽毛、花、そして石の手触り

彫刻された象牙

流星群と夜の隊商

こおろぎの鳴き声——そして人の歌声——

これらすべてを私は遺言にこめました

これらすべてをこの世を去った時、あなたに遺してあげたでしょう

でも、あなたの眼なしでどうしたらそれらのものが見えるでしょう
あなたの手なくして触ることが
どうしたらあなたの耳なしで聞くことも
あなたの心なしで理解することもできるでしょう

これら（眼、手、耳、心）のものも

私はあなたに遺してあげましょう（Lindbergh, R., 173-174 頁）^(*2)

人間、特に現代に生きる我々は、この世の生の大きな部分を人力で左右できると考えがちである。巷には、老化とそれに伴う種々の不具合を無くすための薬の広告が氾濫して一大市場となっている。まるで、その先には、いつか老化や病気、死が訪れることなど見せまいとしているようである。そのことは、老化や病や死が、あってはならないこと、排除すべきものといういびつなイメージを社会の空気の中に広げているのではないだろうか。

それゆえに、人生の後半、特に終わり近くを高齢者、更に、後期高齢者というように区切って、何ら不思議と思わなくなっている。何をもって線を引くのであろうか。このために、高齢者が疎外感と無力感とに悩まされることを気遣う人はいないのだろうか。

本書に示されているように、どんなにすぐれた知性、品性、そして賢明さを備えている人も、病や高齢のために、それらの素質が外からは窺い知ることができないほど、外界との意思の疎通が困難になる場合が多々ある。これは、我々が自分の身に起きることを恐れ、また、近しい人に起きることをも怖れていることである。

Reeve Lindbergh は、このような状態に陥った母の傍にあって、母と、というより、むしろ、自身の心中で、このような衰えた人間の意味について、人生の中でもこの部分が与えられることの意味について考え、たどり着いたのが、彼女が” Journal” と呼ぶ本書なのである。

過去に起きたことはすべて事実として消えずに残る。しかもそれはそれを知

る他者に受け取られ、血肉に入って、影響を与え続ける。勿論、そこには受け手の問題がある。既に述べたように、人間の関係は、一対一であると同時に、双方向的なものである。

Reeve の” Journal” は、主として、娘の側が、殆ど外界との意思疎通ができなくなった母を見守ることによって、自分自身の心中で、人間について、人と人との関係について、生きることの意味について、死について、思いを廻らせて一つの境地にたどり着くまでの記録であるといえる。

3. 老いを看取る者の心の変遷 (2) Elizabeth Kübler-Ross の場合

ここにもう一つ、老化や発作によって、同じように植物状態ともいえる状態にある患者その人の問題として、それでも生きることやその意味について、患者の娘によって示された考察を挙げておきたい。この考察は、今では広く研究され、実践されて、一般にも重視されるようになったターミナルケア（終末医療）や、サナトロジー（死の科学）の先駆的な存在であった Elizabeth Kübler-Ross(1926-2004) の実体験に基づくものである。Kübler-Ross は、自伝である *The Wheel of Life: A Memory of Living and Dying* 『人生は廻る輪のように』(1997) の中で、母親の最期に関する記述を残している。

Kübler-Ross の母親は、献身的に家族に尽くしてきた人物である。その愛する母が脳卒中のために、いわゆる「植物状態」になった。不思議なことに、それに先立つ2週間ほど前、Kübler-Ross は、母と子どもたちとともに、スイスのツェルマットで数日間、自然を楽しんだ最後の夜に、「もしわたしが植物状態になったら、あなたの手で息の根をとめてちょうだいね」と母親から繰り返し懇願される。それは、Kübler-Ross が一族ただ一人の医師であったからであるが、彼女はこれを否定し、「死が自然に訪れるまで、ママを助ける」と答えて、この難しい会話を収めたのであった（1997. 197-198 頁）。

そして、その旅の数日後、母親は脳卒中の発作で倒れてしまう。Kübler-Ross は病院に駆けつけるが、その時、既に母親は身動きすることも、会話をす

することもできない状態であった。「絶望と苦痛と恐怖を宿したその目が、あることを訴えていた。それがなにかはすぐにわかった。しかし、母の要求に応えるわけにはいかなかった。いかなる理由があろうと、母の死に手を貸すことはできなかった」(1997. 198頁)。その後、軽い発作を繰り返し、母親は「植物状態」とみなされることとなった。

自分が「植物状態」になることは、多くの高齢者の恐れるところでもあるし、そのような状態になるぐらいなら、死んだ方がよい、死なせてほしいという、この母親のような考えをもつことも珍しいことではない。そして現実、母親の「予感」は的中し、「恐れていたとおりの状態」となった(1997. 202頁)。

娘としての Kübler-Ross の反応もまた、このような場面での親に対する反応として、多くの娘、息子に共通するものと考えられる。すなわち、娘や息子は、まず、親に残された時間を、親が少しでも楽に、楽しく過ごせる方法を考える。しかし、その「答えはほとんどない」(1997. 199頁)。次いで、神、あるいは運命に対して、何の落ち度もない愛すべき人物である親を訪れる不合理ともいえる人生の終わり方について、疑問を投げかけ、神を非難し、また、何かすべきであると要求をする。しかし、神や運命からは何の回答も得られない。母親の状態の好転のきざしも見えない中で、Kübler-Ross ら子どもたちが選択したのは、手厚い看護は受けられるが、延命のための処置、人工呼吸器などは何も使わない「老人ホーム」(今でいうホスピス)に母親を入れることであった。

医学的、統計学的には「ありえない」ことであったが、その後、母親は4年間生きた。母親の「恐れていたとおりの状態」が4年間続いたことは、「悲劇というほかはなかった」とし、また、母の前もっての頼みを聞き入れなかったことについては痛みを感じながらも、Kübler-Ross は、次のように述べている。

とはいえ、わたしはそれで終わったわけではないことを知っていた。母は依然として愛を感じ、愛をあたえていた。自分だけのやりかたで、

母は成長をつづけ、学ぶべき教訓を学んでいた。そのことはすべての人に知ってほしい。人は学ぶべきことをすべて学んだときに人生を終えるのだ。そう考えると、母に懇願されたように、わたしの手で息の根をとめることなど、以前にもましてできるはずがないと思うようになった。

母がなぜそのような終わりかたをするのか、それが知りたかった。神はこの愛すべき女性にどんな教訓をあたえようとしているのか、わたしはたえずそう自問しつづけた。

しかし、延命装置なしに生存をつづけているかぎり、母を愛すること以外に、すべきことはなにもなかった（1997. 202 頁）。

著者の Kübler-Ross は、精神科の医学博士であるにもかかわらず、この引用の前半部分は、いわゆる医学的、科学的根拠が示されておらず、著者の確信として発信されている。このような、親愛な関係から感じ取った事柄は、しばしば科学的根拠が示されていないという点で、単なる推測であり、信じるに足るものではないと考えられるが、この事例のように真剣な対一の交流による結論は、一つの、或いは、唯一無二の実感として尊重されるべきではなかろうか。そして、このような結論の集積によって、普遍的な理解が生まれるのだと考えられる。

そして、このことは、前章で引用した Frankl の『意味への意志』（1972）の一節と符合するものをあらわしているのではないだろうか。

Kübler-Ross は、自身が「これが絶筆になる」として著した *The Wheel of Life: A Memory of Living and Dying* 『人生は廻る輪のように』（1997）を、次のような言葉で締めくくっている。

あらゆる人は一つの同じ本源からやってきて、その同じ本源に帰っていく。

わたしたちはひとしく、無条件に愛し、愛されることを学ばなければならぬ。

人生に起こるすべての苦難、すべての悪夢、神がくださった罰のように見えるすべての試練は、実際には神からの贈り物である。それらは成長の機会であり、成長こそがいのちのただひとつの目的なのだ。(中略)

自然に死ぬまで生きなければならない。

ひとりで死んでいく人はいない。

だれもが想像をこえるほど大きなものに愛されている。

だれもが祝福され、みちびかれている。(中略)

いちばんむずかしいのは無条件の愛を身につけることだ。

死は怖くない。死は人生でもっともすばらしい経験にもなりうる。そうなるかどうかは、その人がどう生きたかにかかっている。

死はこの形態のいのちからの、痛みも悩みもない別の存在形態への移行にすぎない。

愛があれば、どんなことにも耐えられる。

どうかもっと多くの人に、もっと多くの愛をあたえようところろがけてほしい。それがわたしの願いだ。

永遠に生きるのは愛だけなのだから (374 - 375 頁)。

4. まとめ

これら二人の母親の長い終末期に真剣に向き合った「娘」たちの言葉から読み取れるのは、次のようなことだと考えられる。つまり、人の生涯は、どのように状態が変化しようとも、一本の流れであること、それは本人固有の人生であると同時に、その在り方を通して、他者に影響を与え、特に Lindbergh, R. が強く感じているように、その人の成長に深くかわり、その中で生き続けるものである。そして、いかに終わるかは、自ら決定できるものでも、すべきものでもない、ということではないだろうか。

Lindbergh, R. も、Kübler-Ross も、明確には言及してはいないが、その思想の背景あるいは根底には、キリスト教的な教養があることは明らかである。す

なわち、神や運命など、何らかの超越的な存在の配在に対する敬虔さが、このような考え方へと導き出したものと考えられる。

しかし、それと同時に、このような結論はキリスト教的な思想のみにもたらされるものではなく、洋の東西を問わず、人類に共通して考えうるものであるといえる。

5. 参考文献

Frankl, V.E. 1947. “…Trotzdem Ja zum Leben sagen” 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993.

Frankl, V.E. 1972. “Der Wille zum Sinn.” 山田邦男監訳『意味への意志』春秋社 2002.

Frankl, V.E. 1977. “Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager”, …trotzdem Ja zum Leben sagen. 池田香代子訳『夜と霧』みすず書房 2002.

Frankl, V.E., Kreuzer, F. 1986. “Im Anfang war der Sinn—Von der Psychoanalyse zur Logotherapie”. 山田邦男、松田美佳訳『宿命を超えて、自己をこえて』春秋社 1997.

Frankl, V.E. 1995. “Was nicht in meinen Büchern steht.” 山田邦男訳『フランクル回想録 20世紀を生きて』春秋社 1998.

厚生労働省ホームページ内、総務省統計局のデータ

Kübler-Ross, E. 1969. “On Death and Dying.” 鈴木晶訳『死ぬ瞬間』中公文庫 1998.

Kübler-Ross, E. 1974. "Questions and Answers on Death and Dying." 川口正吉訳
『死ぬ瞬間の対話』読売新聞社 1975.

Kübler-Ross, E. 1997. "The Wheel of Life: A Memory of Living and Dying." 上野
圭一訳『人生は廻る輪のように』角川書店 1998.

Lindbergh, A.M. 1955. "Gift from the Sea." 吉田健一訳『海からの贈物』新潮社
1967.

Lindbergh, R. 2001. "No More Words, A Journal of My Mother, Anne Morrow
Lindbergh." Simon & Schuster.

6. 文中で引用した詩の原文

(* 1)

*Now there are no more words,
But you will know, when I sing
For others, that I bring
To you alone
A leaf, a flower, and a stone.*

—Anne Morrow Lindbergh, from
"A Leaf, a Flower, and a Stone,"
The Unicorn and Other Poems

(* 2)

Testament

But how can I live without you?—she cried.

*I left all world to you when I died:
Beauty of earth and air and sea;
Leap of a swallow or a tree;
Kiss of rain and wind's embrace;
Passion of storm and winter's face;
Touch of feather, flower and stone;
Chiselled line of branch of bone;
Flight of stars, night's caravan;
Song of crickets—and of man—
All these I put in my testament,
All there I bequeathed to you when I went.*

But how can I see them without your eyes
Or touch them without your hand?
How can I hear them without your ear,
Without your heart, understand?

*These too, these too
I leave to you!*